

# 第7回 きれる子、無気力な子、挫折する子

## — 親の力、教師の力、社会の力を考える —

第7回「東北大学100周年記念セミナー」が1月13日、日経ホールにて開催されました。抽選で選ばれた約600人の参加者による満席の会場のなか、最先端研究にかかわる講師陣の熱気あふれる講演が行われました。

最近の子どもや若者は、忍耐力に乏しかったり、気力に欠けたり、少しの失敗であきらめてしまったりする傾向が強いと言われるが、これは学問的にはどのような現象ととらえることができ、何が原因と考えられるのか。さらに、子どもや若者が、希望を見だし、その実現に向かって力強く歩みを進めるようになるために、親・教師・社会は何ができるのか。今回のセミナーでは、東北大学の5人の専門家がそれぞれの学問分野の観点から講演するとともに、脚本家の内館牧子氏が特別講演を行った。

### 「ほどほどの子育ては、愛とスキルから!? ～児童精神科医療の現場で見えること～」

前 宮城県立こども病院児童精神科 科長 本多奈美  
精神科医でロゴセラピーの創始者フランクは、家庭は一人ひとりが生き、生きる意味を実現するための場所と言う。子育てにはスキルが必要で、愛情を根底に子どもの体、心、その発達についての知識と知恵があってこそ育児が可能になる。

### 「友愛と信頼、親子の絆を育む遺伝子 ～オキシトシンの謎～」

東北大学 農学研究科 教授 西森克彦  
オキシトシンは脳の神経で合成され、標的神経に発現する受容体に働き、種ごとに異なる性格や母子関係など生殖社会行動と言われる行動の制御をする。最近の動物や人に関する研究により、オキシトシン系が友愛と信頼、親子のきずなをはくむ可能性が示されている。

### 「学生の自殺をどう防止してきたのか ～大学の模案～」

東北大学 高等教育開発推進センター 教授(学生相談所カウンセラー) 吉武清實  
自殺は自分を調整する上で「短絡」の相に入り込んだときに企図される。学生の自殺防止研究によると、学生の自殺には修学上の出来事との関連がみられる。自殺の完全防止は困難だが、減らすことは可能で、努力が払われる必要がある。

### 「将来が見えない若者たち ～家庭・教育・労働市場の再構築～」

東北大学 文学研究科 教授 佐藤嘉倫  
豊かな社会の実現、脱産業社会の到来、グローバル化の進展という3つの要因が社会制度の変動をもたらし、フリーターやニートを増加させている。学校では問題を自主的に解決できる能力の養成も重要。地域格差解消も課題だ。

### 「自分づくりを支援する教育はできているのか ～幼稚園から大学までのカリキュラムの点検～」

東北大学 教育学研究科 教授 水原克敏  
学習指導要領では幼稚園から「関わり合う力」を育成する方針が取られているが、近年弱体化しており、どの学校段階でも対処が必要だ。最近では「自分をつくること」に無責任な青年が多く、親・教師・社会の力の結集が不可欠である。

### 「『家族で食事』がすべての基本 ～テレビドラマの取材から～」

脚本家・東北大学相撲部監督 内館牧子

2000年4月、私の脚本による連続テレビ小説「私の青空」が放送された。ヒロインを学校給食の調理員にしようと考えた私は、学校給食の現場や多くの関係者への取材を実施した。その結果、あまりにも家庭における食事のいい加減さに戦慄(せんりつ)を覚えた。育ち盛りの子どもたちの食生活のひどさは社会問題であり、その背景には親の認識の低さがうかがえる。食事の乱れがきれる子やしらける子をはじめとする思春期の心の問題に影響を及ぼしていることは学力との相関関係にもはっきりと表れている。家族そろって食卓を囲むことの意義を多くの人に理解していただきたい。



特別講演

第7回100周年記念セミナーの詳細はこちらをご覧ください。 [www.tohoku.ac.jp/seminar100](http://www.tohoku.ac.jp/seminar100)

# 2007年夏に、創立100周年。 新しい東北大学が、動きはじめている。



TOHOKU UNIVERSITY

## ニューリーダーは、現役の研究者。 新総長が語る、これからの東北大学。

昨年11月に東北大学20代総長に就任した、井上明久。科学技術振興事業団、創造科学プロジェクト「井上過冷金属」総括責任者を務めています。また、本年3月から東北大学ユニバーシティ・プロフェッサーを兼任するなど、新材料開発の最前線で活躍する現役の研究者でもあります。今回は井上新総長が、世界最先端の研究者として身を置いてきた、これまでの東北大学、そして「ニューリーダー」として指揮をとるこれからの東北大学について語ります。

### 研究とマネジメントの相乗効果

私にはもともと研究者になりたいという強い思いがあったわけではありません。大学院で与えられた金属研究のテーマが面白くてどんだのめりこんでいき、気づけば研究者になっていたという具合です。現在もそうですが、東北大学には当時から「若い研究者を縛らない」という懐の深さがありました。本多光太郎初代金属材料研究所長(第6代総長)の「今が大切」という考えが受け継がれ、日ごろの研究姿勢を尊重され、装置も自由に使わせてもらいながら、もくもくと研究に打ち込む日々を送っていました。私の研究していた金属フラスコは、今でこそアメリカ、韓国、欧州連合(EU)、東欧、中国など世界的に研究が盛んですが、私たちが研究発表をした1988年からの5年間は、他の論文はひとつも発表されませんでした。それは私たちが、世界で誰もやっていない新しいことにチャレンジしていたという結果です。研究者にとっても非常に恵まれた環境だったと実感しています。総長になったこれからは、研究は続けていきたいと思っています。常に研究の感覚を磨いておくことで、マネジメントもうまくいくと考えます。私は研究をやることでストレス解消に役立っているのだから、研究とマネジメントは今のところはプラスの相乗効果が出ているのではないのでしょうか。

### 「知の共同体」から「知の経営体」へ

これまでの100年とこれからの100年は、国立大学法人化の前後ということでも大きく分けられます。東北大学はこれまで通り「知の継承体」として「知の創造体」ですが、そういった「知の共同体」としてのあり方は、「知の経営体」に変革していかなければなりません。この「知の経営体」という新しい考え方を積極的に取り入れ、変革を確実に実践していくことが、東北大学にとってのこれからの100年の発展であると考えます。そのため現在、東北大学基金の設立や、百周年記念会館の整備、青葉山新キャンパスのプランニング、また海外インターンシップの支援など「知の経営体」としての基盤づくりを着々と進めています。もちろん本学伝統の「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」の理念はこれからも変わりません。そのうえで「知の経営体」として、東北大学のこれからの100年の礎を築いていきたいと思っています。



### 新しい文明・文化を創造しよう

私も若いころは、研究結果を得る努力が空回りして、遠回りをしたこともありましたが、しかし今では、その遠回りが近道の習得につながっていたと実感しています。これから研究を志す方には、はじめから効率ばかりを意識せず、自由のびのびと好奇心を持って努力まい進してほしいと思います。東北大学には心の持ちようでも研究に没頭できる素晴らしい環境があります。そして私の研究がそうだったように、世界で誰もやっていないことを自由にやらせてくれる寛容さも備わっています。そもそも本学の「研究第一主義」という理念は、最先端の学術を学生に伝授し、研究と真摯(しんじ)に対峙(たいじ)することによって新しい文明・文化を創造していく、ということなのです。言い換えれば、これまでの東北大学の歴史は、新しい文明・文化の創造に費やされた100年とも言えるのかも知れません。若き研究者たちには、これまでの東北大学の財産を十分に活用して自己啓発をしてほしいと思います。東北大学は自分の人生を豊かにし、夢を喚起し、かなえさせてくれるところだと思います。好奇心、探究心を絶やさず、ともにこれからの新しい文明、文化を創り出しましょう。

2月にはフランス・リヨン地区のグランゼコールと国際共同セミナー、3月3日には中国清華大学、ソウル大学、シドニー大学などの学長出席の下で、「知の世紀」グローバル・サミットを開催しました。さらに8月には百周年記念祝賀会・式典、12月には100周年記念セミナー「日仏ジョイントセミナー」を開催する予定です。

東北大学総長 井上明久  
東北大学工学部工学研究科金属材料工学専攻課程修了。東北大学金属材料研究所助手、助教を経て、1990年に教授、2000年4月より同研究所所長、2001年4月文部科学省科学官、2002年11月東北大学総長補佐、2005年4月東北大学副学長、2006年6月内閣総理大臣賞受賞、11月より東北大学総長、現在に至る。



TOHOKU UNIVERSITY, CREATING GLOBAL EXCELLENCE  
～ 東北大学は世界最高水準の研究・教育を創造します。～

広告

企画・制作＝日本経済新聞社広告局